

西欧世界はいかにして生まれたか

(C. John McCloskey)

非西洋世界に広がっている西洋文明とその諸制度について語られるとき、その多くのものがキリスト教から生まれてきたものであることはしばしば忘れられている。最近アメリカの歴史家トーマス・ウッツは『カトリック教会はいかにして西欧文明を建設したか』と題した挑戦的とも言える本を出し、その忘れ去られた歴史を一つ一つ説明した(1)。自然科学から大学まで、芸術から近代経済の起源まで、ウッツはそこに教会による改善や影響があったことを示すのである。

(注) Thomas E. Woods, How the Catholic Church built Western Civilization, Regnery Publishing, Washington 2005, 256 p. 29.95\$。

(略)

過ちの自認

大聖年の間、ヨハネ・パウロ2世は有名な「過ちの自認」、つまりこの2000年の間に信者たちが犯した罪について全教会の名において償いの行為をするということを公にした。それに踏み切ったとき、教会全体が新しい千年紀を浄化された奉仕の精神をもって始め、そのことによって単に古い伝統だけでなくその精神的宗教的権威の点からも偉大な他の宗教、文化、国々と忌憚のない対話をしたいという望みを表明した。

この点について次のことは意味深長である。すなわち、この呼びかけがほとんど誰からも相手にされず、教会とその信者に対して犯された罪を認め互いに赦しあおうという声はどこにも上がらなかったことである。

(略)

カトリック教会の貢献

新しい千年紀を迎えるに当たって出された「過ちの認識」という枠の中で、ウッツ教授はカトリックの信仰が「西洋文明」と呼ばれているものを形作るのにいかに貢献したかを語る。ヨハネ・パウロ2世が帰天したのとほぼ同じ時期に出版されたウッツの著作は、過去において西欧世界を形成し現在も世界中に広がりつつある制度のほとんど全てが、カトリック信仰やその信仰に生きた人々から生まれたものであると断言する。

教授は、「我々の庶民文化をささえるマスコミには、カトリック教会を対象にする嘲笑に手を染めないものはほとんどない。教会について学生たちに与えられる少しい知恵は、その信憑性の程度の差こそあれ、教会の腐敗を赤裸々に物語るとされる話しから取られるのが普通である。彼らが習う教会の歴史とは、無知と抑圧と停滞という歴史である」と肩をすぼめる。

「しかし」と教授は指摘する。「西欧文明は、その大学制度、福祉事業、国際法、学問、基本的な法概念などを教会に負っている。・・西欧文明が教会に負っている負債は、カトリック信者

も含めて多くの人々が考えているよりもずっと大きい。・・実際、カトリック教会が西欧文明を作り出したと言っても過言ではない。」

教授は教会と西欧文明の歴史を、古代から現代までの時代ごとに分けて説明する。そうして、西欧の諸制度がしばしばアテネやエルサレムで生まれたにも関わらず、中世の初期から宗教改革や啓蒙時代に至るまでの間、カトリック文明を形作るまで発展していった様子を示す。宗教改革と啓蒙主義の時代になって、これらの反カトリックの主役たちはカトリック世界の中で育ってきた諸制度を自分たちの目的に見合うように使い始め、その起源から切り離した。

近代科学の母胎

現代世界は近代科学の驚嘆すべき進歩発展を目にしている。興味深いことに、ウッツ教授はこの自然科学もカトリックの神学から刺激を受けたと説明する。科学に実験という手法を取り入れた最初の学者はカトリックの信者で、多くの場合司祭や修道士であった。

「カトリック教会が科学に対して敵対しているという誤解は、一般人の中に最も広がっているものであろう。よく知られているガリレオの裁判に、教会が科学の進歩を邪魔したという人口に膾炙した黒い伝説が広く信じられている責任があろう。

しかし、ガリレオの裁判が一般に考えられているようなとんでもない蛮行であったとしても、ニューマン枢機卿が指摘しているように、これ以外にカトリック教会が科学を敵視した例は挙げられないのだ。

近代の実験科学は中世の末期に始まった。教授は、それが可能になったのはこの自然界が神によって無から創造されたものであるから、そこには法則が存在し、それは人間によって徐々に見出されていくはずだとするキリスト教の信仰があったおかげだとする。スタンリー・ジャッキーが詳説しているが、カトリックの信仰があったがゆえに、人々は神によって創造されたこの自然界がいかなるものかを正確に知ることの重要性を意識し、そうすることで宇宙についての理論的見解に一致を見出そうとしたのだ。科学的手法の重要な要素である実験を通じて、我々は神が創造しようとしたこの宇宙の実態に迫ることができる。もし宇宙が合理的でなく、それゆえ人間の理性によって認知されることができないと考えるならば、誰も自然界を調べようとはすまい。

自然界が神によって創造され、それゆえに合理的なものであるという信仰こそが、近代の科学者たちに哲学的な確信を当て、科学研究に没頭させることを可能にしたのだ。(略)

教会と経済

「教会と経済」と題された章も特別に注目に値する。この点についてのウッツ教授の思想は、氏の最新刊 The Church and the Market: A Catholic Defense of the Free Economy, Lanham, MD; Lexington Book, 2005 により詳しく述べられている。この章では、教授は近代経済の誕生に後期スコラ哲学者たちが貢献したという経済史の権威 Joseph Schumpeter の指摘を紹介するに留まらず、「彼らこそ、他のいかなるグループよりも経済学の『創業者』と顕彰

することができる」と主張する。

教授はインフレーション、外国通貨の市場、貨幣価値、正統価格、利子の種類などについてなされた15、16世紀のスコラ哲学者たちの研究を検討する。彼らの経済的思想は、洞察力に優れているばかりでなく驚くほど近代的であった。彼らが18世紀のスコットランド啓蒙主義とアダム・スミスのずっと前にそういったテーマを扱っていたことを忘れてはいけない。

20世紀の偉大な経済学者 Murray Rothbard は経済思想史についての書物で、後期スコラ哲学者たちの思想の検討にかなりの部分を割き、彼らが優秀な社会思想家と経済アナリストであると指摘し、好評を博した。彼は、これらの学者たちの学問的思想は発展を続け、19世紀末の経済思想において重要な学派であるオーストリア学派に収斂すると綿密な論証を行った。

しかしながら、市場経済へのカトリックの貢献は、まだ以前に遡る。例えば、パリ大学の総長を務めた Jean Buridan(1300~1358)は近代的な貨幣理論に重要な貢献をしている。貨幣を、国家の干渉による人工的な産物として考える代わりに、ブリダンが貨幣が国家の意図によってではなく、いかにして自由な交換のプロセスで生まれたかを示した。

近代経済がその基本的な解釈のところでカトリックの思想に多くを負っていると理解するならば、レオ13世の Rerum novarum からヨハネ・パウロ2世の Centessimus annus までの1世紀にわたる教会の社会教説により注目する価値があることも理解できるだろう。とりわけ、経済のグローバル化への速度がますます速まっている今日においては。

過去と未来の狭間で

トーマス・ウッツの新刊は、大学や高等教育の現場で西欧文明の授業をする際には、必見の書となるだろう。もし、近代世界とその諸制度が「ばらばらの進化」のようなものから偶然に生まれてきたのではなく、カトリックの信仰と道徳に深い影響を受けた人々の努力のおかげで生まれてきたのだと正直に認める用意のある人々が教壇に立つならば。

この再発見はこの上ない重要性を秘める。現在教会は急速に発展している（なかでも南半球と東方世界で）が、このことによって信仰の土着化をいかに進めるかということや、その思想と制度をどのように伝えるかというような課題を突きつけられている。

ウッツの書物は、20世紀のカトリックの歴史家にして評論家である Hillaire Belloc のような厳肅さをもって我々を魅了し、いかにして過去を見、未来を形作っていくかを教えてくれよう。

(ACEPRENSA, 8-14 – XI – 2006. 118/06)